

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)
<https://amda.or.jp/>
 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
<https://www.amda-minds.org/>
 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
<https://www.amdamedicalcenter.com/>
 AMDA 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

2025 年 7 月 25 日 VOL.48 第 314 号

発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1 2025 年

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail:member@amda.or.jp

夏号

夏

救える命があればどこまでも

AMDA Journal インタビュー

被災地に寄り添う鍼灸師として

林 篤志 先生

林 篤志 (はやしあつし)：岡山県倉敷市出身。明治国際医療大学で鍼灸を学び、東京九鍼研究会の石原克己氏に師事。2016 年より東明堂石原鍼灸院で研鑽を積み、2017 年に地元倉敷市で『西明堂 林鍼灸院』を開業。以降、訪問専門鍼灸師として地域医療に尽力しつつ、災害支援活動にも積極的に関わっている。

AMDA との出会い

AMDA 林先生と AMDA の関わりは、2018 年の西日本豪雨の時が最初だったと伺いました。

林 そうですね。西日本豪雨からのお付き合いになります。AMDA の名前自体は以前から知っていましたし、AMDA 主催の災害鍼灸の講演会にも参加したことがあります。実際に被災地で活動している様子を見て、こういう支援の形があるんだと知りました。私自身、ボランティアで被災した地域の片付け作業などを行っていた時に、AMDA から鍼灸師ボランティアの募集があり、参加するようになりました。

AMDA 西日本豪雨時には、総社市の鍼灸師、石堂先生が AMDA の調整員として活動されていましたが、石堂先生についてはご存じでしたか？

林 はい。石堂先生はもともと有名な先生で、千葉にいた頃からお名前は知っていました。実際に AMDA の現場で一緒に、鍼灸師のネットワークの広がりを感じましたし、今でも交流が続いています。こうしたつながりが、その後の支援活動にも活かしています。

コロナ禍を経て、その後の支援に参加

AMDA 東北での支援活動は、先生にとって初の県外派遣だったそうですね。

林 そうなんです。令和元年の台風 19 号被災者緊急支援活動 (宮城県丸森町)、令和 6 年の能登半島地震被災者緊急支援活動、能登豪雨災害被災者緊急支援活動に参加しました。能登半島地震の時は、初詣の日に地震があって、なんとなく嫌な予感がしたんですよね。AMDA のスタッフの方から連絡がありました。当初は鍼灸ではなく、初期対応要員として調整員での参加でした。自分が行って本当に役に立っているのかという不安がありました。実際に初めて「調整員」として現地に入り、その業務の難しさを痛感しました。正直



なところ、“もっと学んでからもう一度行きたい”という思いが残っています。

現場での備えと教訓

AMDA 初出動では備えの面でも苦労があったそうですね。

林 はい。衣類や食料に対する見通しが甘かったと反省しています。ライトや電池、小分けにできて動きやすい服装など、現場の状況が刻々と変わる中では、しっかりとした準備が必要だと実感しました。

豪雨支援の特別な思い

AMDA 能登地震から約半年後、先生は能登の豪雨支援にも参加されました。

林 現地の状況を見て、“これは放っておけない”という強い気持ちがありました。大変な状況の中で、少しでも役に立てたらという思いが根底にあります。ただ、行く側としては、まずは自分の体を大事にすること。そして、自分を送り出してくれる周囲への意識を忘れないことが大切です。支援に行くこと自体が経験となりますが、同時に“無理をしない”というストッパーも必要だと感じます。

支える側への敬意とチームとしての支援

林 現場では“役に立ちたい”という思いが大きくなりますが、それだけではダメだと気付かされました。現地で活動する我々を支えてくれる本部スタッフの苦労もとても大きいんです。現場だけでなく、見えないところで支えている人たちの存在を忘れてはいけません。皆様のご支援があって活動ができる、そのことを強く実感しました。

最後に：支援に関わるすべての人へ

林 “頑張りたい”という気持ちだけでは続かない。だけど、“まだやれる”という気持ちがあるうちは、できる限り無理のない範囲で関わっていききたい。そんな風に思っています。



ミャンマー大地震被災者支援活動



3月28日（現地時間12時50分）、ミャンマー中部マンダレー近郊を震源とするマグニチュード7.7の地震が発生しました。長年協力関係にある現地団体『People's Health Foundation』（PHF）を中心に、AMDAは直ちに現地関係者に連絡。その後、4月4日に医師1名と看護師2名からなる調査チームを同国の最大都市ヤンゴンに派遣しました。

今回、現地の社会情勢に鑑みて、調査チームは震源から600キロ以上離れたヤンゴンで活動することを決定。ヤンゴンに本部を置くPHFとミーティングを重ね、被災状況を確認するとともに、被災地にどのような支援を届けることができるか検討しました。

協議の結果、AMDAはPHFと協力して、医薬品の提供ならびに経済的な支援を行うことになりました。医薬品に関しては、状況が落ち着いてきた際に必要となる抗菌薬、降圧薬、感冒薬、糖尿病薬などを市内にて購入し、現地協力者を通じて、マンダレー管区保健局に寄付しました。

また経済的な支援については、「支援が届きづらい遠方の被災地を支援したい」というPHFの意向を尊重し、首都ネピドーをはじめ、マンダレー、バゴー、ザガイン管区およびシャン州にある保健局や大学、医療機関など、計12ヶ所を対象に行いました。

被災地でのニーズは刻々と変化するため、経済的な支援の活用法については、支援先の判断に委ねることになりました。PHFによれば、寄付金は、浄水器、飲み水、蚊帳、



医薬品の購入に加え、医療者が不足している地域に人員を派遣するための費用などに充てられるということです。

ASEAN防災人道支援調整センターによると、この地震による死者は3,740人、負傷者は5,104人、行方不明者は66人に上ります。また5万戸を超える住宅が全半壊したことから、1万8千人以上が避難所に身を寄せており、親族の家に避難している人の数も26万5千人を上回っています。（6月9日現在）

（GPSP推進戦略局担当部長 岩尾 智子）



AMDA カンボジア支部：2024年度の主な活動



2024年度、AMDA カンボジア支部は毎年恒例の青少年フォーラムを8月と3月の2回に渡って開催しました。これまで医学生や看護学生を対象に、HIV・エイズや性感染症の予防啓発を目的に行われてきましたが、近年では、女性の生殖行動と健康に関する権利や子宮頸がんに関する啓蒙など、時代に即したテーマを取り上げています。

開催第6回目と7回目を迎えた今年度は、急速に進化する科学技術に対して、医療者がどのように向き合っていくべきかを取り上げ、医療現場におけるAIやVR技術等の導入例を紹介。また副次的なテーマとして、

今後、学生たちが社会に出た際に必要となるスキルや、感情面における対処法を扱いました。

このように、今年度のフォーラムは、目まぐるしく変化する時代の潮流に学生を備えさせるべく、2030年を見越した内容で講演が行われました。

尚、同支部が毎年青少年の健全な育成を目的に行っている学生サッカー杯は、医師国家試験と時期が重なったため、今年度は延期となりました。

これら一連の活動は、長年、（株）山一観光様のご支援により続けられています。

（国際部 近持 雄一郎）



モンスーンで被災したインドの『お年寄りの家』に穏やかな日常をもう一度



6月1日、貧困率の高いインド・ブッダガヤにある『お年寄りの家』は、モンスーン(季節風)による暴風と大雨で被災しました。お年寄りが暮らす部屋は無事だったものの、台所部分と牛舎の屋根は吹き飛ばされ、鉄骨の柱も曲がり、吹きさらしの状態になっています。

ここは、身寄りのないお年寄りにとって、終の棲家(ついのすみか)となっており、現在、24人のお年寄りが1つの大部屋に肩を寄せ合って暮らしています。この施設の設立者であり、2009年にブッダガヤに開院したAMDA ピースクリニックの元職員であるベータ氏から緊急支援要請があり、AMDAは『お年寄りの家』の修繕を支援することを決定しました。

現在、台所が使用できないため、お年寄りが暮らす大部屋の隅の小さいスペースで、軽食を用意するか、地元の支援者に食事を提供してもらう綱渡りの日々が続いています。さらに、暑い日が続く中、屋根のない牛舎にいる牛は、炎天下で過ごしており、このままでは体調を崩してしまいます。搾乳した牛乳は施設に暮らすお年寄りに提供し、余剰分は売って、『お年寄りの家』の運営費に充てられます。牛は、重要な収入源です。

本格的なモンスーンシーズンが到来する前に修復できるよう、6月14日に修繕工事が始まりました。一日も早く、お年寄りが安心して暮らせる日常が戻るよう、AMDAは工事の進捗を見守り、応援していきます。



(インド事業担当 岩尾 智子)

インド・ビハール州シュリプール村での手動ポンプ式井戸建設



インド・ビハール州のブッダガヤ近郊にあるシュリプール村は、“ダリット”と呼ばれるカースト制度の中で最も身分の低い人が多く住んでいる、貧困率が非常に高い村です。

お年寄りや子どもを含む、約67世帯650人が住んでいるこの村では、停電が頻発し、電気が数日から1週間ほど止まることも珍しくありません。そのため、井戸水を吸い上げるための電動ポンプがあっても使い物にならず、これまで村人は、水不足に度々悩まされてきました。そこで、今年3月末にAMDAは、停電しても井戸水を汲むことができる手動ポンプ式の井戸を、村の近くにあるヒन्दゥー教の小堂付近に建設しました。

村人たちは、「水は生活の中で最も貴重なものです。飲み水としてももちろん大切ですが、それだけではなく、色々な場面で井戸水を活用しています。ありがとうございます」と満面の笑みで語り、大変喜んでいました。

停電時は、大人から子どもまでもがバケツや桶に汲んだ水を頭の上に載せて家まで運びます。村の人たちからは、「生活がしやすくなった」と喜ばれ、「私たちは責任を持ってこの井戸を大切に活用し続けます」という力強い言葉が聞かれました。

この度、(株)新通の樋口会長の御令室、樋口美恵様より、(株)新通エスピーの青山様を通じて、「インドの恵まれない人に水を届けたい」という、ありがたいお申し出をいただきました。

(インド事業担当 あるちゃん ジョシ)



きました。おかげさまで、AMDAの活動地において3つ目となる井戸を建設することができました。樋口様、青山様に心より感謝申し上げます。

ウクライナ人道支援活動：避難所で暮らす人たちの今



6月、ウクライナ人道支援活動の初期から一緒に活動している現地協力団体『メドスポット』の理事長、アンドラッシュ医師とオンライン会議を行いました。AMDAは同団体に対して医薬品を中心とした支援を行っています。今回、丁度、アンドラッシュ医師が避難所で活動中であったため、その様子を見ながら、避難者と画面越しに話すことができました。

ロシアとの国境近くから電車でウクライナ西部ウジホロドに避難してきた男性は、妻と高校生の娘とともに、3メートル四方の個室で、2年以上、避難生活を続けています。アンドラッシュ医師によると、この避難所はシャワーとトイレは共同であるものの、環境も衛生面も恵まれているといえます。

娘は避難前に通っていた学校のオンライン授業を受けており、妻は、仕事を見つけ、日中は働いているとのことでした。男性には持病があり、部屋に

ることが多いそうです。男性は、「日本の皆さんには、このような状況を絶対に経験してほしくありません。支援に感謝しています」と話しました。

また、メドスポットと活動する現地団体の代表者、ナタリー氏は、「避難者の多くは、爆撃で家を失い、先行き不透明な状況に日々不安を募らせています。さらに、支援団体の数が明らかに減少しており、自分たちが忘れられていく恐怖もあります。『毎朝ベッドを整えても、何をしたいかわからない』といった声も聞かれます」と語りました。



アンドラッシュ医師は、「中東に注目が集まる中、活動継続のための資金調達が厳しい状況です。一方、地元の医師が負傷者の治療のために戦地に向かったり、海外に避難したりと、医療は手薄な状態。今では、私たちがかかりつけ医のようなものです」と支援を継続する意向を語りました。

AMDAはメドスポットをはじめとする現地協力団体とともに、ウクライナを継続的に支援していきます。
(ウクライナ事業担当 岩尾 智子)



インタビューに応じてくれた避難者の男性（右）

ネパール大震災から10年、未来への一歩：ベタンチョーク村での医療支援と防災啓発活動



2015年4月25日に発生したネパール大地震から10年を迎え、AMDAネパール支部は現地協力団体『ロータスネパール』と連携し、ベタンチョーク村で医療支援と防災啓発を目的としたイベントを実施しました。村は山間部に位置し、豪雨や地滑りなど災害リスクが高く、2024年にも大雨による被害が発生しています。そのため、防災意識の向上と医療アクセスの改善が急務とされていました。

イベントは防災セミナーとヘルスキャンプの2部構成で行われ、自治体職員や医療スタッフ、地域ボランティアが参加しました。防災セミナーでは地震・洪水・地滑りへの備えや避難行動、応急手当の方法が紹介され、参加者には実用的な資料が配布されました。「災害時の行動が分かり安心した」と安堵の声が聞かれました。

ヘルスキャンプでは、合計79人（男性41人、女性38人）が一般健診および婦人科健診を受診しました。健診の結果、尿路感染症、胆石、慢性炎症などの疾患が複数名に確認されました。特に婦人科健診では、1名の女性に子宮頸がんの陽性反応が見られ、精密検査が必要と判断されました。

経済的理由や距離の問題で受診が難しい人も多く、参加者からは、「専門的な診療を受けられて心強かった」といった感謝の声が寄せられました。必要な患者には、この村から一番近い、バネパ市の病院が今後の支援を行う予定です。

本活動は震災から10年の節目にあたり、今後の地域支援と防災体制構築への第一歩となりました。AMDAネパール支部は今後も地域と連携し、誰もが安心して暮らせる社会の実現を目指します。尚、この事業は、フェリシモ基金様からの助成を受けています。

(ネパール事業担当 あるちゃん ジョシ)



モンゴル内視鏡技術協力事業

2017年9月にスタートしたモンゴルでの内視鏡技術移転事業は、モンゴルの熱心な内視鏡医たちの努力と向上心により、年を重ねるごとに進化してきました。現在では、日蒙両国の医師がともに現場に立ち、安全かつ高度な内視鏡治療の実現を目指す「内視鏡技術協力事業」として実施しています。

8回目となる今回の活動は、6月8日から6月16日まで、小倉記念病院消化器内科主任部長の白井保之医師と、AMDAの佐藤拓史理事長の指導の下、日本モンゴル教育病院で行われました。内視鏡的静脈瘤結紮術（EVL）1例、内視鏡的静脈瘤硬化結紮術（EISL）2例、胃静脈瘤に対するEIS（ヒストアクリル）1例の治療を実施。治療に先立ち、内視鏡医と放射線科医が共同でCTによる門脈血行動態の評価の必要性について検討し、治療方針を確認しました。これまでになかったこの取り組みに、医療現場の前進を実感しました。

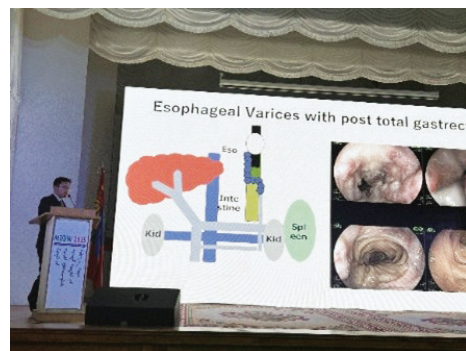


さらに今回、日本から上部・下部内視鏡シミュレーターを持参し、ワークショップも開催。日本モンゴル教育病院関係者をはじめ、ウランバートル市内外の病院の医師も参加しました。若手の医師たちは、毎日、治療後に白井・佐藤両医師によるシミュレーターでの研修を受け、確かな技術を身につけようと真剣に取り組んでいました。今後の継続的な技術習得を支援するため、上部内視鏡シミュレーターは、同病院に寄贈されました。

また、同病院の新院長、ブレヴドルジ教授と佐藤理事長の間で、協力協定を更新することにも合意し、今後の連携強化を改めて確認しました。このほか、白井医師は、モンゴル消化器学会において講演し、多くの関心を引きました。

モンゴルの内視鏡医とともに歩み、確実に内視鏡の知識と技術の継承が進むよう、AMDAは来年も同地における活動を約束しました。

（副理事長 難波 妙）



AMSA との連携拡大に向けて

AMDA 設立の4年前、1980年に当時医学生だった菅波茂前理事長が立ち上げたのがAMSA（アジア医学生連絡協議会）です。AMSAの活動は国際的に広まり、母体であるAMSA Internationalに所属するメンバーは、総勢4万人ともいられています。

現在、AMDAの原点ともいえるこの学生ネットワークと、AMDAとの連携が進みつつあります。去る4月中旬には、AMSAタイ支部の副代表、ピチャモルさんが岡山のAMDA事務所を訪問。菅波前理事長ならびに佐藤理事長と懇談しました。



ピチャモルさんと菅波前理事長



佐藤理事長とモンゴルの医学生たち

また、5月には、AMSA日本支部のメンバー4名とオンラインミーティングを実施し、AMSAの同窓生にも参加してもらいました。これまでのAMSAとAMDAの歴史、メンバーの卒業後の活躍と協力について紹介し、学生たちからも積極的な質問が寄せられました。今後の協力への期待も生まれ、8月にはAMSAのメンバーによるAMDAの事務所訪問が予定されています。

さらに、モンゴルでは、AMSAモンゴル支部のメンバーが佐藤理事長の内視鏡セミナーに参加するなど、各国でAMSAとAMDAの連携が広がりつつあります。

（副理事長 難波 妙）

現在ご寄付受付中の活動は・・・

- | | | |
|---------|--------------|----------------|
| ・緊急救援 | ・ウクライナ人道支援 | ・AMDA フードプログラム |
| ・カンボジア | ・インドピースクリニック | ・ネパール医療支援 |
| ・東日本大震災 | ・こども食堂支援 | ・AMDA 中高生会 |
| | | ・内視鏡技術移転 |
| | | ・災害事前対策 |

石川県輪島市・ごちゃまるクリニック再始動ー地域医療再生への一步



2024 年元日に発生した能登半島地震と、その後の豪雨により、石川県輪島市は甚大な被害を受けました。AMDA は今年 3 月下旬に現地を訪問し、復興の歩みと地域の現状について、市の中心部で『ごちゃまるクリニック』を運営する小浦友行医師にお話を伺いました。

火災で焼失した輪島朝市の跡地は更地となり、市内には 3,000 棟以上の仮設・応急住宅が整備されています。しかし、人口減少が進み、学校施設への被害や児童・生徒の転出による学校再編など、地域社会には今も深刻な課題が残っています。地震で損傷した校舎やグラウンドの地盤崩落といっ

たインフラ面への影響も大きく、長期的な視点での地域再建が求められています。

そうした中、AMDA は、地震と洪水という二重の災害に見舞われた同クリニックに対し、エコーや吸引機、輸液ポンプなどの医療機器を寄付しました。

震災から 1 年半、地域の方々とともに困難を乗り越えてこられた同クリニックが、6 月 30 日に外来診療を本格的に再開しました。住民の方々は、通い慣れたクリニックの再始動を待ちわびていたと思います。

さらに、小浦医師は、隣接する被災民家を一般社団法人『ごちゃらあと』として再生し、地域文化の拠点づくりにも取り組んでいます。近所の人たちが気軽に立ち寄れる、かつての「ふるさと」を感じられる居場所として、地域に新たなつながりが生まれています。

「奥能登プライマリ・ケアの最前線として、誇りを持って診療と地域ケアに励んで参ります」と語る小浦医師の言葉には、地域医療を支え続ける深く暖かな想いが伝わってきます。AMDA は今後も、輪島の復興を後押ししていきます。

(副理事長 難波 妙)



東日本復興支援～宮城県南町紫神社前商店街からの報告～

AMDA は、2011 年の東日本大震災以来、宮城県気仙沼市にある南町紫神社前商店街を通じ、復興に向けた支援を継続しています。

今年 3 月、岩手県大船渡市で発生した山林火災に対する支援では、同商店街が AMDA と共同で準備を進め、少しでも困っているの方々のお手元に届くようにと、大船渡市民体育館に、歯ブラシ 500 本、ボックスティッシュ 500 個、Tシャツ 1,000 枚、バスタオル 300 枚を届けました。

また、復興住宅の入居者や生活再建中の方々を支援し、地域交流の推進を目的として、今年度も生活支援物資の配布を行いました。毎回 100 人程度が食料品等を受け取る中、「何もかも値段が上がり、年金だけで生活するのは大変。助かります」といったお声を多くいただきました。

同商店街では、震災から 14 年目を迎え、『3.11 メモリアルイベント』



を開催。日本各地でパワーコーラス・クワイアを指導している GONZA さんが献歌し、また参列者に備蓄食料の大切さを知ってもらおうと、長期保存が可能な食料品のセットが提供されました。

5 月に行われた『ゴールドンウイークイベント』では、じゃんけんでお菓子がもらえるゲームのほか、食料配布とともにビンゴ大会を開催。市内から 5 組のアーティストが参加した音楽ステージ等も行われ、家族連れをはじめ、県内外からの多くの来場者で賑わいました。

(総務部 太田 浩子)



連合岡山・東部地協 2025 ふれあいメーデーに出展



2025 年 4 月 26 日(土)、岡山ドームで開催された『連合岡山・東部地協 2025 ふれあいメーデー』に出展しました。当日は、120 人以上の方が AMDA ブースにお越しください、AMDA の活動紹介パネルの展示や、「AMDA クイズ」を通じて、たくさんの方にこれまでの取り組みを知っていただく機会となりました。

来場者の方々からは、「AMDA の名前は聞いたことがあったけれど、こんなに多くの国で活動しているとは知らなかった」といった感想もいただき、AMDA の国際的な活動の広がりを知っていただけたことを嬉しく思います。

当日は、日頃から AMDA の活動を支えてくださっているボランティアの皆様、そして AMDA 中学高校生会のメンバーも会場に駆けつけ、展示パネルの説明など運営をサポートしていただきました。「説明がとてもわかりやすかったです!」「若い世代が自らボランティア活動に取り組む姿が素晴らしい!」といった温かいお言葉も多数いただき、励みになりました。ご来場いただきました皆様、誠にありがとうございました。

(プロジェクトオフィサー 金高 摩耶)



AMDA 中学高校生会オープンクラス 2025 春を開催



2025 年 5 月 10 日(土)、岡山市北区にある岡山国際交流センターにて、『AMDA 中学高校生会オープンクラス 2025 春』を開催しました。

本イベントは、新年度のスタートに伴い新規メンバーの募集を目的として実施されたもので、当日は中学生・高校生の参加者に向けて、AMDA および AMDA 中学高校生会の活動内容についてのプレゼンテーションを行いました。

イベント後半には、AMDA の医療チームとして被災地に向かったことを想定し、対策などを考えるゲームを通じて、参加者同士が交流を深める時間を設けました。和やかな雰囲気の中、活発なコミュニケーションが交わされ、場の一体感が生まれました。

当日、その場で入会を希望された参加者もあり、大変有意義なイベントとなりました。ご参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。

<メンバー募集中!>

AMDA 中学高校生会では、随時新規メンバーを募集しています。詳しくは、AMDA 公式ホームページをご覧ください。また、ご不明な点やご質問等がございましたら、AMDA 中学高校生会公式 LINE までお気軽にお問い合わせください。

(プロジェクトオフィサー 金高 摩耶)



消防職員対象に「世界の文化と生活」講演会を実施

5 月 30 日、全国市町村国際文化研修所より依頼を受け、「世界の文化と生活」について講演を行いました。全国の消防署から集まった職員 31 人を対象に、AMDA の海外活動、特にインド・ネパールでの健康増進や生活・農業支援の取り組みを紹介しました。

加えて、ヒンズー教徒やイスラム教徒の文化、食生活、慣習などについても解説し、異文化理解の重要性を強調しました。近年、日本国内でも外国人住民や観光客が増加し、消防職員が緊急対応時に文化的背景への理解を求められる場面が増えています。

受講者からは、「宗教による食文化や慣習が異なるため、消防行政サービスの提供時、事前説明を行い同意の上サービスを提供することが大切だと感じました」「災害支援の話と、宗教・文化についての話をそれぞれ説明してくれたのはわかりやすく、個人的には外国人を仲間に入れることが一番良い解決方法になると感じました」「AMDA の活動を知ることができ、世界での文化、生活の違いを知ることができました」などの声が寄せられ、講義が有意義であったことが伺えました。

(プロジェクトオフィサー あるちゃん ジョシ)

